

操業マネジメントシステムを確立し、 世界水準以上の安全操業・安定供給を実現します。

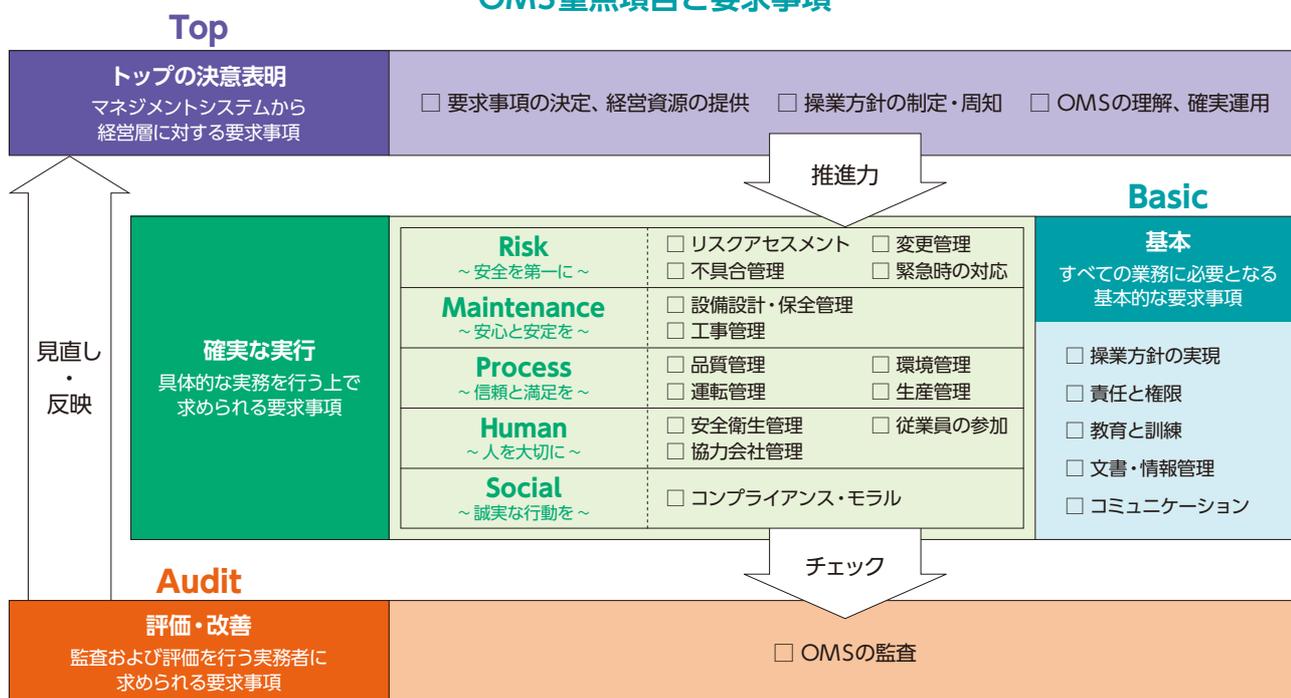


「操業マネジメントシステム」の構築

コスモ石油グループ製油所部門は、2006年から「チェンジ21活動」を推進し不安全不具合の撲滅に取り組み、2013年には「製油所安全改革委員会」を立ち上げ、同委員会を軸に、製油所の安全施策に関するPDCAをしっかりと回してきました。

そしてさらに千葉製油所と東燃ゼネラル石油(株)千葉工場との共同事業の計画始動を機に、マネジメントの体制とシステムを全面的に見直し、全社統一のマネジメントシステム「操業マネジメントシステム(OMS)」を2016年1月から運用開始すべく、準備を進めています。OMSは、安全操業・安定供給の実現に不可欠な重要項目として、23の要求事項で構成される取り組み方針を定め、それを基に本社と製油所がそれぞれの取り組みと連携を強化する仕組みです。コスモ石油グループはOMSを継続的に運用強化していくことで、世界水準以上の安全操業・安定供給の実現をめざしていきます。

OMS重点項目と要求事項





コスモ石油は石油精製を事業の中心として研究開発、原油調達、石油化学、潤滑油、海外製品トレーディング等幅広いビジネス基盤を有し、独自性のあるビジネスを展開しています。石油精製は資本集約型産業と言われますが、国内外の社会、経済環境の変化が激しさを増す時代においては、社員の創造力と新しい取り組みへの意欲こそが最大のリソースとなります。コスモ石油は石油産業の構造変化をリードし、顧客のニーズとステークホルダーの期待に応える企業へとさらに進化すべく、世界水準以上の安全操業・安定供給を実現し、他社との地域ごとと事業ごとの連携にも積極的に取り組みます。そして幅広い事業分野での成長可能性を追求するため、全社員の英知と努力を結集してまいります。

3大消費地に隣接したコスモ石油グループの製油所

堺製油所 (大阪府堺市西区築港新町)

1968年10月操業
大消費地京阪神への供給基地で、関西国際空港、神戸空港へのジェット燃料も供給。また、最新鋭の重質油分解装置を有し、環境にやさしい生産に努める。



四日市製油所 (三重県四日市市大脇町)

1943年7月操業
中部、北陸、近畿地方へエネルギーを供給するほか、2011年にミックスキシレン蒸留装置を建設し、海外向けの石油化学製品事業も展開。



千葉製油所 (千葉県市原市五井海岸)

1963年2月操業
原油処理量22万バレル(1日)でコスモ石油最大。
日本でもトップクラスで、首都圏を含む東日本全域への安定供給基地。

事業提携で国際競争力を持つ製油所へ

コスモ石油と東燃ゼネラル石油グループの極東石油工業は、2015年1月7日、両社の千葉製油所の統合を目的とする共同事業会社「京葉精製共同事業」を設立し、共同事業を開始しました。今後、両製油所間にパイプラインを敷設し、完成後は精製設備を一元化します。

また、コスモ石油と昭和シェル石油グループの昭和四日市石油は、両社の四日市製油所の事業提携を2017年3月から開始し、設備の最適化を通じて両社の競争力強化を図ることで合意しました。

事業提携によるシナジーを創出することで、国際競争力を強化していきます。

原油油種多様化への取り組み

日本は原油調達に関しほぼ全量を輸入に頼っており、そのほとんどを中東およびアジアから調達してきました。一方で、米国でのシェール革命の影響やアジアの新興国を中心とした石油需要増加によって、世界規模で原油の流れに変化が起きています。

このような背景から、コスモ石油グループでは、エネルギーの安定供給に向けて中東で石油開発を進めるとともに、調達原油の多様化に積極的に取り組んでいます。そうすることで、日々大きく変動するオイルマーケットから、割安な原油を調達する機会を拓けることとなります。これによって製油所の競争力向上に大きく貢献すると同時に、これまで以上に安定的な調達が可能となると考えています。

最近のコスモ石油の実績としては、アメリカ・ロシア・メキシコをはじめカザフスタンや西アフリカ諸国などこれまでにない多様な国からの調達を行っています。



コスモ石油は2014年10月、アメリカからシェール由来のコンデンセートを日本企業で初めて輸入し、油種の多様化も実現しました。コンデンセート(左)は、ガス田から液体分として採取される原油の一種で、超軽質で粘度が低いため泡立ちます。